

一生を台湾の夜明けに捧げた父王育徳

「王育徳紀念館」の開館

台湾独立建国聯盟日本本部委員長・本会理事

王おう
明理めいり

王育徳紀念館の二つの意義

二〇一八年九月九日、父の故郷の台南市に「王育徳紀念館」が開館した。一九四九年に二十五歳で台湾を出て以来、帰国を許されなかった父が、晴れて故郷に迎えられる日であった。九十歳の母も出席して御礼の挨拶をすることができた。

「王育徳紀念館」がどのように受けとめられるのかは、遺族として一番不安に思うことだったが、本年六月現在、すでに二万三千人の見学者があったという（紀念館は台湾の表記）。

日本李登輝友の会の理事や会員の皆様の他にも、わざわざ台南まで見学に行って下さった方が数多くいらっしや

るようで、この場をお借りして御礼を申し上げます。

王育徳の紀念館を造る話は、以前から台南市の文学者たちを中心に出ているが、本決まりになったのは二〇一六年五月、母と私が当時の頼清徳・台南市長と食事を共にしたときのことであった。蔡英文政権が発足したからこそできた「英断」であったと思う。育徳は台湾でもそれほど有名ではないし、それどころかブラックリストに載っていた人物である。そんな人物の紀念館を公費で造ることは、一昔前には考えられないことだった。

この紀念館は、育徳の業績を展示するためのものであるが、実はもう一つの意義があるように思う。それは、台湾



王育徳の生家から徒歩数分の台南公会堂裏の「呉園」内に造られた王育徳紀念館（台南市民権路2段30號、月曜日と火曜日は休館）

人が戦後数十年もの間、失っていたものを形にして示すということである。台湾人意識を持つことが許されなかった時代に、本当は息づかなければならなかったはずの台湾人の思想や生活や文化を、日本で育んだ王育徳を通して表わすことになったのである。

育徳は、一九二四年（大正十三年）に紀念館から徒歩数分の台南市本町



勉学に励んでいた昭和11年（1936年）当時の兄の王育霖（台北高等学校）と王育徳（台南一中）兄弟

（現在の民権路二段）に生まれた。教育熱心な親の希望もあって、当時の子供が受けられる最高の日本教育を受けて育った。兄、王育霖に「将来は台湾社会の役に立つ人間になろう」と励まされ、兄と同じ台北高等学校、東京大学へ進学した。李登輝先生は高校の一年後輩にあたる。台高では哲学や原典講読まで学び、社会を担うに足る教養を身に付けたのであった。

しかし、こういう台湾人の知識や教養の蓄積は、日本の敗戦と共に終焉を迎えた。戦後の台湾の状況は終戦後の日本以上に過酷で最悪であった。台湾人の意志も問わずに日本人による法治

から中国人による人治へと、強制的に理不尽な変換を余儀なくされたからである。台湾には知識水準の高い、近代思想を持つ台湾人が六百万人も住んでいたが、接収に来て戦利品のように占領した中国人は規律も良識もない前近代的な人々であった。特に、台湾人にとって苦痛だったのは、台湾語や唯一のリテラシイであった日本語を禁止され、全くの外国語のような北京語の習得を強要されたことであった。

そのような状況の中、育徳は台南一中の社会科学教師を務める傍ら、演劇の分野で活躍し、一世を風靡した。しかし、劇中で国民党を皮肉ったために政府に目を付けられ、これが後に亡命を余儀なくされる原因となった。

一九四七年二月二十八日、中国人の圧政に対する台湾人の不満が爆発し、全島に台湾人の自治を求める抗議活動が広まった。だが、この「二・二八事件」は蒋介石軍による無差別殺戮によって無惨にも鎮圧されてしまった。

蒋介石軍は特に日本教育を受けたエリート層をターゲットにした。犠牲者は約三万人と言われているが、育徳の兄育霖もその一人であった。育霖は台湾人で初めて日本の検事になった人で、戦後、台湾の法曹界を担うつもりで帰国し新竹市の検察官となったが、正義感が強かったが故に中国人に睨まれ、わずか二十八歳で命を落とすことになった。

二・二八事件以降も国民党の弾圧は執拗に続き、一九四九年に蒋介石が台湾へ逃げ込むことになると、戒厳令が再施行され、取り締まりは一層強化された。「逮捕者リストの次は王先生です、早く逃げて下さい」と知人に促され、育徳はやむなく台湾を離れたのだった。まず、香港に渡り、そこから船で日本に密入国した。翌年、当面の帰国は難しいと判断した育徳は、妻を呼び寄せた。そして、次女の私が生まれるタイミングで日本政府に申し出て、正式な亡命（特別在留許可）を認

められたのである。

育徳はその後、二度と台湾に帰れぬまま、日本で生涯を閉じた。しかし、日本で得た自由な環境のなかで、様々な台湾に関する仕事をする事ができた。つまり、日本に来たからこそ、台湾のために生きることができたのだ。

まず、東京大学に復学し台湾語の研究に取り組んだ。後に「台湾語音の歴史的研究」により文学博士となった。大学で教鞭を執る傍ら、台湾文学の研究、台湾独立運動（中華民国体制からの独立）、台湾の歴史書の執筆、台湾人元日本兵士の補償請求運動などに全力を傾けた。特に、台湾独立運動のために設立した「台湾青年社」は海外における台湾独立運動を組織的に発展させていく大きな役割を果たした。

テーマごとに分けた五つの部屋

王育徳記念館は、業績を展示するのに、五つの部屋をテーマごとに分け、全ての説明文に中文と日本語を併記す



つかの間の休暇で京都大学近くの哲学の道を訪れた50代後半の王育徳・雪梅夫妻

ることとした（第二室のみ、台湾語と日本語の併記）。

第一室…文学青年から多面的活動家へ（年表、実家に関連する物品、幼少期から亡くなるまでの遺品、著作などの展示の他、公視テレビ制作の「台湾百年人物誌―王育徳の巻」の上映）

第二室…言葉は民族の魂である―台湾語の研究（台湾語に関する論文や著作の展示、著書『台湾語入門』『台湾語初級』のために育徳自身が吹き込んだ音声や外国語大学での授業の音声）が聴

ける装置など）

第三室…民主と自由を求めて―台湾独立運動（関連資料、台湾独立運動の同志の紹介、機関誌『台湾青年』が創刊号から五百号まで閲覧できる装置、育徳自身が吹き込んだ「台独の声」が聴ける電話など）

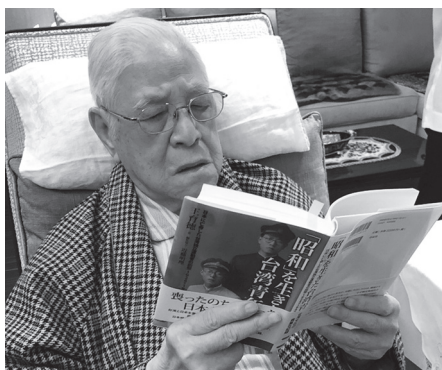
第四室…非情の判決を乗り越えて―台湾人元日本兵補償（育徳が一九七五年から亡くなるまで、全力を注いだ台湾人元日本兵のための活動の全般の説明や、活動に使用された資料の展示、尽力した台高関係者の紹介など）

第五室…小さな書齋が大きな世界を開く（育徳の自宅の書齋の再現。東京の自宅から搬入された勉強机、書棚、文房具、台湾青年社の会議や補償問題の事務に使われた座卓、碁盤など）

また記念館に入ると、すぐ左手に李登輝先生から贈られた言葉が掲げられている。

〈王育徳記念館に寄せて〉

李登輝



王育徳著「昭和を生きた「台湾青年」」の育徳と日本で密会した1961年6月のエピソードを読まれる李登輝先生(2018年3月、台北市内のご自宅にて)

王育霖さんと王育徳さんの兄弟は、ともに私の台北高等学校の尊敬する先輩でした。兄、育霖さんは台湾の司法を背負って立つ人材でしたが、非常に残念なことに二二八事件で犠牲になられました。弟の育徳さんは日本に亡命されましたが、私は東京で一度お会いし、台湾の将来について語り合ったことがあります。

住む場所も与えられた環境も異なりましたが、私たちは共通の理念で結ばれていました。それは、台湾人の幸せ

を願い、その為に最善を尽くすということでした。

育徳さんの魂はこの地で、台湾の幸福を見守り続けるでしょう。」

李登輝先生が一九六一年、台湾独立運動者であった育徳の自宅を密かに訪問したことについては、産経新聞に連載中の「李登輝秘録」第三部「政治弾圧時代の苦悩①②」(六月十八日、十九日掲載)にも書かれている。まさに秘話であったが、着目すべきは、同時代人の李登輝先生と王育徳が、心の中に「台湾人の理想的な国をつくる為に一生をかけよう」という共通の理念を持つて、ぶれずに貫いたことである。

父の切望が芽吹いた台湾

開館約二カ月前、東京の王家から物が台湾へ向けて運び出された。母は「記念館を見に来てくれる人に、複製ではなく本物を見せたいから何でも持つて行って下さい」と潔かった。長年見慣れた品々が梱包され出て行った後

に残されたのは、机と書棚の置かれていた場所の少し青い畳の跡だけだった。柱にもたれて座り込んだ母はしばらく言葉が発しなかった。寂しい気持ちには私も同様であった。日本に来てから一つ一つ増えていった品々は、どれもが父の生きていた証だったのだ。なんだか父が母を置いて台湾に一人で帰ってしまったような気持ちであった。それから空っぽの部屋で母と二人、来し方のよしなしごとを語り合った。

一九八五年、父は六十一歳の若さで旅立ってしまった。だから、一九八六年の民進党の誕生も、一九八七年の台湾人元日本兵士補償問題の解決のための議員立法の成立も、一九八八年の李登輝総統の誕生も見ることができなかった。しかし、父が切望したことが、ちゃんと芽吹いたのだ。信念のままに一生を捧げた父の生き方を私は誇りに思うと同時に、そんな愚直な人を記念館を作って迎えてくれた故郷の人々から感謝したいと思っている。